



大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和7(2025)年
5月号

通巻 657号
毎月23日発行

(題字 矢追日聖)

★発行日 令和7年5月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷製本
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



大倭紫陽花邑の令和元年の航空写真(大倭殖産(株)提供)

新シリーズ「私と大倭」(第1回) 国家から邑・里への回路

野 本 三 吉



未来への不安が拡大する時代

本号から新しく「私と大倭」というシリーズを始めることにしました。年に何度か大倭にかかわりのある方々に自由に思いを語っていただくことにします。

編集部

世界中が戦争に巻き込まれ、多くの犠牲と破壊が行われ、もう2度とこのような武力による戦争や争いが起らないようにと誓い合ったあの第2次世界大戦の終結から今年で80年。

けれども未だに各地で戦争は続いており、その背景となる貧困や人権問題が多発している現代。日本も軍備を拡充し、侵略が可能となる体制づくりが進められている。世界中が望んでいた平和で安定した社会づくりは大きく軌道を外れ、不安が高まる状況が続き拡大している。

ぼくらは何か大切なもの、生きる本質を失ってしまっただけではないか。

そう気付きながら未来が見えない時代。

かつてぼくらが子どもだった時、幼い子どもは神であり、7歳になったら人間になると教えられ大事に育てられてきた。

七五三が祝われるのもその一つ。また年をとると、老人は「神」になっ

て山へ還るものだ」と教えられてきた。先祖、先人の人は山に還り、山の神となって村里の人々の暮らしを守ってくれるのだとも聞いて育ってきた。

したがって「童」と「翁」は神と人間の両方を生きた存在で、村々には「お地蔵様」や「道祖神」が置かれ、お盆や正月には亡くなった人々が戻ってくるとも信じていた。

つまり、人と神はつながっており、共に生き、支え合っているという実感があった。しかし、明治以後、近代化を進めてきた日本社会は、進歩、発展、拡大を目標として経済成長をとげ、気がつけば「大量生産、大量消費、大量放棄」という資本主義のサイクルに巻き込まれ「今だけ、カネだけ、自分だけ」という生き方の時代になってしまった。

安保闘争が高揚した1960年に大学に入学したぼくらの世代は、時代の変革期であることに気づき、時代を変えるために活動してきたが闘争は挫折し、世の中が落ち着くにつれて現実を受け入れざるをえない状況になってしまった。ぼくは何とか次の世代につなげたいと考え教師になったが、学校もまた国家のミニチュアで、体制に従わざるをえない構造の中にいることを体験することになった。

そんな模索の中で、ぼくは日本協同体(キプツ)協会と出会うことになった。

イスラエルのキプツ協同体を知り、日本の各地に点在していた土着共同体とも出会うことになる。

人と人との交流を基本においた「新しき村」、ものは誰のものでもないという「無所有」の思想を実践していた「山岸会」。

さらに「多色彩共存」の「大倭紫陽花邑」とも出会い、無階級で自由な共同体があることを知った。

たばくらは、次への展望が見え始めていることを感じたのであった。

汎神的世界と日常との回路

それ以来の数年間、ぼくは日本列島の北から南まで歩き、各地の土着共同体を訪ね、一緒に生活もさせてもらった。

その中で特に心に残ったのは沖縄で出会ったノロ・ユタの方々の「沖縄ミロク会」という集団であった。彼女達は沖縄戦で亡くなった多くの方々の遺骨やその霊を慰めつつ、本島や離島を巡り、村人とも交流をしていた。

ぼくもこの集団に参加し、離島を共に歩き、人や自然から溢れ出る思いも受けとめることになった。沖縄には人も自然も霊的な存在であり、全ては交流できると考えていた。つまり、命あるものは神であるという考え方であった。

ノロの方々は、ごく自然に海や山、樹木や動植物とも交流することができた。

それまでぼくが生きてきた日常とは異なる現実を始めはとまどったのだが、生活を共にすることで、こうした日常を自然に受け入れることができるようになった。

1980年代に入り、ぼくは横浜に戻り、日雇い労働者の街、寿町で生活相談員として働くことになった。寿町には関東地方だけでなく、北海道、東北、関西、九州、沖縄さらには韓国やアジアの国々からも労働者が集まっており、さまざまな文化が混在していた。

にもかかわらず、互いに排除し合うこともなく、共存して暮らしているのである。

日本各地の土着共同体は、来る人を拒まず、去る人を追わず、共に生きることを大切にしてきていた。

いた。

寿町の人々の暮らし方は、こうした日本やアジアの基礎文化と重なり合うように感じられた。しかも、ドヤに泊まり、日々さまざまな現場の労働に出掛ける労働者の姿は、狩猟採集を中心とした縄文人の生活とも類似しているように見えた。

そこで、寿町を縄文時代の集落と見たてて、そこに暮らす子ども達の生を『裸足の原始人たち』というノンフィクションにまとめることにもなった。

さらに、アルコール中毒や精神的な課題も抱える人々との共生は、どこか古代社会の汎神的世界とも重なり、ぼくの中では沖縄と寿町を融合させている典型として、大倭紫陽花邑は存在していた。この頃、歴史化学者の安田徳太郎さんの著作を読み、直接、安田さんを訪ね、ヒマラヤの山岳地帯に住むレプチャ族が、日本人と同系の民族であることを知り、ぼくはレプチャ族を実際に訪ねることもあった。

また信州の古代民族、洩矢族とも出会うことになり、諏訪地方に残る日本古来の信仰、ミシャグジ祭政体ともかわることになった。

そんな中、大倭紫陽花邑のメンバーで、ぼくと同世代の柴地則之さんの『ユートピアを追いかけて』(追悼集1991年)を読むことができた。

柴地さんは同志社大学鶴見ゼミの学生時代に「交流の家」建設にかかわり、1964年に紫陽花邑に参加している。

以来、大倭印刷所、大倭殖産、大倭病院などを次々と設立し、文化行事や大倭会の設立など紫陽花邑の基盤を築き、1989年、48歳の若さで帰幽された。追悼集には柴地さんの次のような文章が収録されている。

「霊的一体感による究極の一体社会、これが日

本古代であった」「汎神論的思想は、古代の日本人にとっては日常感覚であった。これが現代に再生するとなればどういうことになるか」

柴地さんは古代の汎神的世界観を現代社会の基本に据えて生きていくための社会のあり方、暮らし方を実現したいと考えていたのだと思う。その思いはばくの中にもあり、柴地さんの思いと共に、ばくは生きたいと思っている。

原点への下降と、邑の再興へ

矢追日聖さんを中心として、東洋の一角に大倭紫陽花邑が生まれ、人類の原郷としての邑・里の姿が現出することになって80年。

今後はどのような展開になっていくのかを考える時、大倭紫陽花邑をしばしば訪ねてこられていた詩人、谷川雁さんの描いていたイメージがヒントになる。

『段々と降りてゆく』よりほかないのだ。

下部へ下部へ、根へ根へ、花咲かぬ所へ、暗黒のみちるところへ、そこに万有の母がある。存在の原点がある。初発のエネルギーがある」(現代思潮新社『原点が存在する』)

そこでばくが見るものは何か。

また、ばくらと同世代の思想家、柄谷行人さんの『力と交換様式』(岩波書店、2020年)が気になる視点を提出している。彼は、社会の基に「交換」があると考え、その交換のあり方から世界史の構造を考え、その交換のあり方の変容から世界史の構造を次の4つに分類をしている。

Aは「贈与と返礼」の時代、Bは「服従と保護」の時代、そしてCは「貨幣による交換」の時代。その上で、これからの時代をDの時代として、それがどのようなものになるかを提示してくれている。

る。

柄谷さんによれば、現代はCに示される資本主義の時代、つまり貨幣によって交換が行われている現実と、もう一方で国家による交換様式B、つまり服従と保護による支配体制の2つによって運営されていることになる。しかも、この2つの交換様式による生活では庶民の暮らしは不自由になり、既にその限界に達しているというのである。

従って、次の交換様式Dと変化しなければ、社会そのものが成り立たず、破壊してしまう危機的状況だとも述べている。

そして、その次への展望を柄谷さんは、様式A(贈与と返礼)の未開社会に戻るのではなく、Aを高次元のレベルで実現しなければならないという。

自由で対等な交流、必要な時に必要なものが入手できるような条件や環境が整えられた交換が成立する社会。それが実現する社会だと柄谷さんは述べている。しかし、具体的なイメージは提出されておらず、そうした社会が求められていることを提示しているだけである。

こうした社会の実像について、ばくの中では例えば山岸会の実像の中に見える気がする。

山岸会は「全てのものは誰のものでもない」という発想の中で共同体創りをしている。

海も山も空気や水も、全ての存在は誰のものでもない。自分達が住んでいる家や家具、日用品も全て誰のものでもなく、本当に必要な人が話し合いの中で使っていくことが自然だというのである。つまり、「無所有」の思想を基本としている。従って共同体のメンバーが率直に話し合い、納得の上で全てのものが活用されていくということである。

それぞれが自由に生き、交流、交換ができるためには、共に暮らす共同体のメンバーが顔見知りであり、考え方や生き方がわかっていることが必要になる。

そうした関係が成立するためには構成メンバーには一定の数的な限界があり、共同体の人数は、300人以内位になるというイメージも湧いてくる。共同体が大規模になれば、どうしても代理人を選定するという、間接民主主義をとらざるをえず、管理や統制が必要になってくる。拡大し管理された組織は巨大化し、能率も上がるけれど、一人ひとりの自由や独自性は失われてしまう。その典型が国家であり、必然的に支配・抑圧という権力構造を持つことになってしまう。

対等で自由な交流、交換が成立するためには、より小規模な邑の存在が必要となる。

こうした邑内での自由交流と、小規模な邑と邑が自由に、しかも対等に交流する連合は、国家とは違う質と関係を生み出す。

さらに生命科学者の中村桂子さんは『人類はどこで間違えたか』(中公新書、2024年)の中で、人類は近代化する中で、進歩するために一律化を進め、古いものを次々と捨て、多様化しない社会を作ってきたという。多様化すること、古いものを大切に引き継ぐことを失えば、人類も生命力を弱めてしまうと指摘している。

更に仏教学者の末木文美士さんは『霊性の日本思想』(岩波書店、2025年)で、日本は近代化する中で、西欧文化に追いつくことに熱中し、表層部分では発展したが、日本の風土から生まれた感性や思想を失ってしまったと指摘している。

生命誌の一員として、他の生命体とも共生、交流し、目には見えない霊性との交流、汎神的世界とも交流していた文化をも消し去ってしまったと

いう。

効率化、一律化、大型化の中で失ってしまった小型化、多様化、生命の鼓動をシッカリと取り戻す必要があるという。

こうした指摘を受けとめ、ぼく自身のこれからの生き方、また大倭紫陽花邑とのかかわりを考えていくとき、大倭紫陽花邑でジツクリと熟成されてきた東洋の無、沈黙と空白の中から浮かび上ってくるイメージがある。

ぼくにはそれが、今生きている場から、小さな邑を育てることに思えてならない。

人類は今、大きな分岐点に立たされており、次への展望が見えなくなっているが、ぼくら一人ひとりの内的世界には、全ての自然と溶け合いつつ生きてきた人間という生命体が息づいており、必ず他の生命体と交流していくという実感がある。

その小さな邑・里への回路を、大倭紫陽花邑はシッカリと示していると感ずる。

ぼく自身が、自然神そのものになって、他の自然神と共に、まもなく生まれ出る予感の中で、その原郷、紫陽花邑と触れ合い続けたい。

法主さんへの一枚のメモ —「縁」について

杉本順一

法主さんが帰幽されて20年くらいたった頃でしょうか。私は法主さんが暮らされていた瑞光院の茶の間にある書棚に、柴地則之さんが作った大倭殖産(株)の会社案内が残されていないか探しに行った時のことでした。

縦12cm横8・5cmの小さな紙きれ一枚が残されているのに気付きました。ほかに残されている書類とは無関係のようなので、取り出して読んでみました。(内容は写真の通りです。)

私には最後の2行が心に響きました。

「…大倭教の神はそれに背いているので、悪鬼魔神です」とあり、裏面は法主がいつも押す日付のゴム印と法主さん自筆のメモでした。

「平成5年2月15日 院の郵便受に入っていた正午ごろ」とありました。

大倭教を邪教と表現するメモ。このメモにゴム印と法主さんのメモ。こうまでして残された法主さんのお気持ち、どう考えればいいのか。

一片のメモをポイと捨てるわけでもなく、残された法主さんの心に触れてみたいと思いました。

法主さんは常々「わしの書くものは、全部遺言のつもりで書いている」と言われていました。

現界の法主さんとメモを投函していった人とは、今世では形の縁で言えば逆縁です。

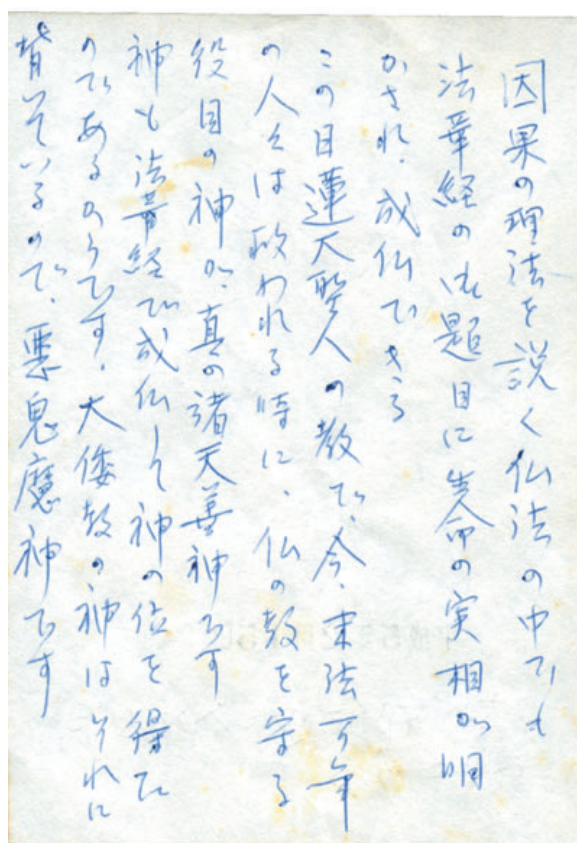
法主奥津城の碑にある「うつしみは よしくつ

るとも とこしえに むすぶころの かわるものかは」という法主さんの言葉を考えながら、ふと思い出しました。

昔、法主さんに縁を求めて来た青年が、自分が決めた「邑の中で自然な形で法主さんに出会いたい」ということをテーマに何日か紫陽花邑で暮らしたのですが、その間法主さんに会えることなく帰って行ったことがありました。後日法主さんにその話をして、私が「〇〇さんは縁が無かったんやなあ」と言ったら、法主さんは一言「縁の無い者はないわなあ」と。

縁というものを改めて考えさせられたことを思い出しました。

法主さんにメモを置いていった人も、来世で法主さんにお会いできる道しるべを、法主さんは残していかれたのではないのでしょうか。



平成5年2月15日

院の郵便受に入っていた。
正午ごろ

じんずうりきによぜ
「神通力如是」

の真意をさぐる

第三十六回

大倭教の源流にさかのぼって

原文

(十一月二十七日の続き)

同日 正午、十二時半、屋内ニテ。

「日、米、國交断絶、太平洋開戦、近々空襲、戦勝、瑞兆」題目。字にて示現せらる。

「龍田明神出動。汝風神トナリテ敵艦撃沈セヨ。太平洋波高シ。題目。日本ト戦交アハスハ、南洋群島フィリッピン附近。

我日本ノ艦隊其處デ出動スルナリ。如何ニ日本ノ艦隊防グトモ、吾日本ノ内ニ、我が皇孫ニアザナス悪魔、神、変化ノ者ヲ使ハシテ、一人残ラズ撃チクレム。秘ス可シ。コレ奇稲田姫命ノ御宣託ナリ」

同日、午後十時。

倭姫挨拶。神楽。悪魔怨敵退散。

「君ガ代ハ松ノ緑ニ色マシテ田鶴鳴キ渡ルアサボラケ日ノ光ニモ似タルカヤ。ア、芽出度キハ皇孫ノ稜威四方ニ耀キテ我が皇孫ノミナサケニ浴スル者カズ知ラズ。ア、有難キ極カナ。題目。

豊葦原ノ中津國、如何ニ悪魔ガ攻ムル

トモ八百萬餘ノ神等ガ手ニ手ニ妙法ツルギモテ、悪魔退治ニ出カケラレ、四方山海静マリテ八百萬ノ神等ガ挙リ挙リテ祝ヒ玉フ。コレ日本ノ有難キ國ノユワレナリ。

大内山ノ松ガ枝ニ雲ワケ出テサシ昇ル、朝日ノ光ゾ芽出度ヤナ。田鶴鳴キ渡リ、皇孫ノオンヨハヒヲ寿ギ奉ル。ア、芽出度キ極カナ。ア、芽出度キ極カナ」題目。

倭姫挨拶下ル

十一月二十八日 朝七時於鳥見庄山。

太陽ヲ拝セル時。

天津皇祖御言ノ葉。

聖寿無窮。

澄ミ渡リタル大空ニ我レ高クサシ昇リ四方照スコノ光我ガ日本ノ皇孫ノ四海ヲ治メル大稜威、ソノ稜威代代永久ニ色マサリ幾千代マデノ後マデモ代代永久ニ光マシ耀キオルコソ芽出度ケレ。

明鳥、カイト鳴クハ瑞兆ノ我ガ日本ノ皇孫ノ稜威ヲ四方ニ輝カシハ紘一宇ノキミトシテ出デラレルキザシナリ。(カラス鳥)

四周の松間にて鳴く)

晴レ渡リタル大空ニ鳶鳴渡ルソノ日コソ、諸天善神カン喜シテ寿ギ奉ル日デア
ルゾカシ」題目。鳶三羽頭上低く飛び交ひピーヒョロー
ピーヒョローと鳴渡る、朝、風出て雨あ
りたるが拜神の間は降らず雲低くおうて
いたり。

註釈

①日、米、國交断絶、太平洋開戦

この神語りが行われたのは11月27日で真珠湾攻撃によって太平洋戦争が開戦したのは翌月の12月8日であるから「字にて示現せらる」の言葉は予言である。当時「大東亜戦争」と呼ばれていたこの太平洋戦争の概要を『広辞苑』(岩波書店)によって、まずおさらいしておこう。

「第二次世界大戦のうち、主として東南アジア・太平洋方面における日本とアメリカ・イギリス・オランダ・中国等の連合国軍との戦争。十五年戦争の第三段階で、中国戦線をも含む。日中戦争の長期化と日本と日本の南方進出が連合国との摩擦を深め、種々外交交渉が続けられたが一九四一年十二月八日、日本軍のマレー半島上陸、ハワイ真珠湾攻撃によって開戦。戦争初期、日本軍は優勢であったが、四十二年後半から連合国が反攻に転じ、ミッドウェー・ガダ

ルカナル・サイパン・硫黄島・沖縄等において日本軍は致命的打撃を受け、本土空襲、原子爆弾投下、ソ連参戦に及び、四五年八月一日日連合国のボツダム宣言を受諾、十五日の玉音放送を経て、九月二日無条件降伏文書に調印」

②瑞兆

太平洋戦争は日本の敗戦で終わるのだが、ここではあえて「瑞兆（めでたいきざし）」という言葉が出てくるのにはどういう意味があるのだろうか。次のような法主の説明が参考になる。

《我々人間たちが一番良いことやとか、こうすればいいんだということを考えておったとしても、その考え通りになれば逆に不幸になっていく。ところが戦争に負けたという、私たちの考えておったことと逆の現象がでたために、戦後の日本人と日本が救われているんです。そういうような動きを神意と言う。神さんの心です》

『『おおやまと』令和6年12月号2頁』

③龍田明神

龍田大社大和川の北岸に近い山裾に東面して鎮座する。祭神は御天柱命・国御柱命であるがこの二神は風神志那津比古神・志那津比売（伊邪那岐・伊邪那美の子神）の別名であろうといわれている。

（白水社『日本の神々』（谷川健一編）による）

参考「原文の予言と歴史の記録」

今回の原文の初めから12行目までは、昭和16年11月27日正午以後の日本がこれからどうなるかを予言されていると思われる。この日以後の日本の変化を戦後の記録を参考に考えてみた。

原文の「題目」の二カ所に「秘ス可シ」を加えた三カ所に注目し、原文の右にABCと印をつけて、昭和16年12月8日から昭和20年8月15日まで

の時間を三分してみた。

●Aの予言の部分の参考資料として

「その日の外務省」

ジョセフ・C・グルー

（当時・アメリカ駐日大使）

1941年12月8日

午前7時私は加瀬（俊一）からの出来るだけ早く外相にあいにきてくれという電話で起こされた。

加瀬は五時から私に電話をかけていたのだが、通じなかったといった。私は急いで服を着て七時半ごろ外相官邸に着いた。

加瀬は友誼的であり、東郷はこわい顔をして、形式的だった。東郷は私の外務省への報告に含まれている短い声明をなし、十二月八日付の十三頁に上る覚え書を私に手渡し、今日これが野村大使から國務長官に伝達されて会議を決裂させるのだといった。最後の章は次の通りである。――

日本政府は米國政府の態度に鑑み、これ以上の交渉によって何らかの取決めに到達することは不可能なりと考慮せざるを得ぬことを遺憾ながら米國政府に通告するものなり。

東郷は天皇に会った（午前三時だったと私は聞いている）といい、この覚え書は大統領のメッセイジに対する天皇の回答を構成するといった。そこで彼は会議期間を通じての私の協力に感謝する短い演説をやり、階下の玄関まで私を送ってきた。だが真珠湾については一言も言わなかった。

⑦毎日新聞社『滯日十年・下』より

「ヒトラー（ドイツ總統）」

ウィリアム・シャイラー

「実際、あのときは、ロシアの冬の不意の襲来がわが国民の士気に、この上もなく重くのしかかり、ドイツのだれも彼もが、おそかれ早かれ、アメリカの参戦は確実と見て、意気消沈したときだった。したがって、日本の介入は、われわれの立場からいうと、もっとも、その時機を得たものだった」

『『ヒトラーの秘密談話』より』

そしてまた、真珠湾のアメリカ艦隊にたいする日本のすばらしい奇襲攻撃が、ヒトラーの賛嘆の情を掻き立てたにちがいないかった。（中略）ヒトラーがそれまでたびたびうまくやってのけて自慢にしていたと同じ種類の《不意打ち》だったので、それはなおさらのことだった。ヒトラーは、十二月十四日、ドイツの金の鷲有功大十字勲章を大島大使にさずけたとき、そのことをいった。

『きみたちは正しい宣戦布告の仕方をした。あの方法が唯一の適正なものだ』

④『第三帝国の興亡』（創元新社）より
※⑦の共『一億人の昭和史 毎日新聞社』より

●Bの予言の部分の参考資料として

「マレー沖海戦」

太平洋戦争開戦直後の1941（昭和16年）12月10日に、マレー半島クワンタン沖で戦われた日英戦。日本軍のマレー上陸作戦を阻止するため出撃したイギリス東洋艦隊の戦艦プリンス・オブ・ウェールズとレパルスの2隻を日本海軍の攻撃機が爆撃と雷撃で沈没した。

（小学館『日本大百科全書』より）

「戦勝の美酒に酔う」

1942（昭和17年）5月6日マニラのコレヒ

(毎日新聞社『二億人の昭和史』より)

倭姫「天皇の世は松の緑の色はあざやかに、鶴が

晴れ渡りたる大空に鳶が鳴きわたるその日こそ
が、諸天善神が歓喜して御祝い申し上げる日であ

あじさい日誌

4月8日 午後2時から大倭大本宮拝殿において、須佐緒祭が開かれました。この日は昭和38年4月8日の法話をお聞きしました。

4月9日 1時30分から教務本庁で秋の一泊文化行事を決めるために、大倭会会長の岸田哲さんと文化行事担当の溝口富士男さんが、生駒市にある生駒交通トラベルサービスの伊藤善規さんと話し合われました。細かな打ち合わせがされたようで、皆さん楽しみにしてください。

4月12日 午後4時から本紙『おおやまと』の編集会議が教務本庁で開かれました。

4月13日 午後2時から大倭拝殿において大倭会主催の祓会が開かれました。「家族」がテーマでした。前日に奈良市の西大寺に引越してきたばかりの新婚の大倉有宏ご夫婦が参加されました。

4月15日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

この日は箭負（やおい）祭。なぜこう言われるかについては『ながそねの息吹』の中の「一大事の因縁―血縁と地縁の神秘」を参照されたい。

4月23日 午後2時から大倭大本宮拝殿において月次祭が行われました。

この日は昭和38年4月23日の月次祭法話をお聞きしました。午後4時から大倭会館において大倭会の役員会が行われました。今回から大倭会の役員として四日市市の中村勝彦さんが参加されました。

4月30日 午後4時から本紙『おおやまと』の編集会議が教務本庁で開かれました。大和西大寺駅近く引越してきた大倉有宏さんが本紙の新編集委員として参加されました。

5月3日 10時ごろ山田隆夫・昭代夫妻、2時ごろ三宅淳之・博子夫妻が来邑。

5月4日 午前8時から大倭墓地の枯れ葉掃除が行われました。

5月6日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

午後6時半から大倭会館において邑倭の会が開かれました。大倭安宿苑では

4月28日 令和7年度第1回新入職員研修会が実施され新卒採用者含む9名が出席しました。

（菅原園）

4月9日 午後からお花見を兼ねて散歩をしました。園の前の桜のトンネルを眺めながら歌を歌ったり、おやつを食べたりでお花見を楽しみました。

5月1日 ドライブサークルでご利用者2名と職員2名で外出しました。日頃外に出る事が無い方に優先的に参加してもらい、車内から外の風に触れてもら

いました。気分転換になり笑顔で園に戻られました。

（須加宮寮）

4月20日 奈良県障害者スポーツ大会（卓球）に4名の方が参加し、3名がメダルをもらいました。1名は残念ながらメダルをもらうことができませんでした。が、「来年、頑張る」と意気込んでおられました。

4月24日 単独防災避難訓練を行いました。車椅子の方・足元不安定な方は各フロアのエレベーター前に、その他のご利用者は玄関先に避難しました。

（長曾根寮）

4月15日（デイ）リハビリコーナーに机を並べ、満開の桜を見ながら昼食を頂きました。

4月30日・5月1日（特養）職員手作りの鯉のぼりイラストを飾り、端午の節句にかかわる音

楽とお話を楽しんでもらいました。

（茂毛路園）

4月8日 午後から茂毛路園周辺に咲いている桜（かわづ桜・ソメイヨシノ）のお花見をしながら和菓子をいただきました。

（八重垣園）

4月24日 満開になった桜を見ようと紫陽花邑内を散歩しました。皆さん「きれいなあ」と感激されていました。

大倭会通信

令和7年度第1回役員会（幹事会）が、去る4月23日に大倭会館において出席者9名で開かれました。

令和6年度会計報告と令和7年度の事業計画の説明があり、いずれも承認されました。また新しい幹事として中村勝彦さん

第353回大倭会文化行事
～白峯御陵に崇徳上皇を偲ぶ～

日程 2025年10月19日（日）・20日（月）

行き先 白峯寺、道後温泉、しまなみ海道

【宿泊】道後温泉 道後館（愛媛県松山市）

【定員】28名

費用 4万円

申込み・問合せ

溝口富士男 080-3101-1639

※矢追日聖著『ながそねの息吹』の中の「崇徳院の招きに応じ讃岐へ再度まいる」を参考にしてください。

法主言の葉
本物のある所を太加天腹
といい、現世、現身はその
本物を映した世界である。

あんない

が選任されました。
秋の1泊文化行事は10月19日（日）・20日（月）に計画しています。（案内参照）
文化講演会は11月9日（日）に博物学者として広く活動しておられる沖縄大学教授の盛口満さんにお願ひしています。また文化講演会の担当に青山法義さんと中村千久佐さんが加わってくれることになりました。
今年度も力を合わせて大倭会の活動を盛り立てていきましょう。（岸田）

*月次祭（大倭神宮）
6月6日（金） 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催祓会
6月8日（日） 午後2時より大倭拝殿にて。6月は12月とともに大祓の月です。各々の場所でお心掛けしましょう。

*月次祭（大倭神宮）
6月15日（日） 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭（大倭大本宮）
6月23日（月） 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。